様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月　６ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０３１７７

研究課題名（和文）イギリスにおける第一次世界大戦の戦死者追悼と地域コミュニティーに関する研究

研究課題名（英文）The remembrance of the fallen of the First World War and the local communities in Britain

研究代表者
吉田　正広（YOSHIDA, Masahiro）

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：１０２８４３８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、ロンドンにおける第一次世界大戦の戦死者追悼のための記念碑や式典を、企業や地域社会の観点から、重層的なアイデンティティ形成の問題として位置づけた。特にロンドン・シティの金融機関の従業員の戦死者追悼に焦点を当て、新聞記事を史料とすることで「戦死者追悼の社会史」を目指した。
　シティ自治体が関係した市民的記念碑「ロンドン部隊記念碑」と、歴史的にシティと密接な関係を持つ軍隊によって設立された「王立フュージリア（シティ・オブ・ロンドン連隊）記念碑」という二つの記念碑を軸に、シティ金融市場という特殊な地域コミュニティの視点から戦争記念碑を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　第一次世界大戦の戦死者追悼の問題は、日本では国民国家の観点から戦死者の顕彰の場として位置づけら、「国家のために死ぬこと」を軸に考察されてきたが、イギリスにおける研究成果をフォローすることでまずは「悲しみの場」として位置づけ、その上で「顕彰の場」として理解すべきであると提言した。また、新聞史料を利用して当時の人々の心性にまで迫る「戦死者追悼の社会史」を目指した。研究対象をロンドン・シティに限定することで、地域コミュニティの観点から戦争記念碑を考察することで、記念碑研究の方向性を提示した。
　今日、現実に戦争が起こるような状況下で、戦死者追悼という視点から戦争について考える手がかりを提示した。

研究成果の概要（英文）：This study considered some war memorials of the First World War in London from the perspective of business companies, regional communities and etc. So, the memorials considered show various identities of those who commemorated the fallen. The articles of some newspapers was utilized as evidences, which tell the detailed stories of the memorials. I aimed at a Social History of Commemorations of the War Dead. There are two important memorials in the City of London. One is London Troops Memorial, which was a civic memorial erected by the donation of citizens of the City and County of London and maintained by the City Corporation. The other is the Royal Fusiliers (City of London Regiment) Memorial, which was erected by the Regiment and presented to the City Corporation. Considering the two memorials, I looked at the war memorials in London from the view point of the identity of the London money market.

研究分野：イギリス現代史

キーワード：イギリス　第一次世界大戦　戦死者追悼　社会史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

戦争記念碑をめぐる研究状況は、著しい展開を見せている。原田敬一『兵士はどこへ行った ――軍用墓地と国民国家』（有志社、2013 年）、松本彰『記念碑に刻まれたドイツ――戦争・革命・統一――』（東京大学出版会、2012 年）、津田博司著『戦争の記憶とイギリス帝国――オーストラリア,カナダにおける植民地ナショナリズム』（刀水書房、2012 年）がある。これらは、戦死者の埋葬や追悼の諸問題を、国民国家あるいは国民形成の視点から論じている。

その一方で、第一次世界大戦の戦死者追悼に関する欧米の研究を見ると、国民国家だけに限定されない多様な視点で研究がなされている。プロスト（A. Prost, “ Monuments to the Dead ” in Realms of Memory, Vol. II: Traditions, New York, 1997.）は、フランスの村落共同体の記念碑とそこでの式典を、社会教育の場として地域社会のアイデンティティ形成に関わるものと理解している。イギリスの代表的研究は、集団の記憶ではなく、個人の記憶に力点を置き、記念碑を遺族による悲しみの場として理解し、平和主義への可能性を展望する（Jay Winter, Sites of Memory, Sites of　Mourning: The Great War in European cultural history, Cambridge, 1995）。

また、ロンドンおよびロンドン東部のコミュニティー毎の記念碑の設立過程にまで踏み込んだ研究もあり、その場合には、コミュニティー毎のアイデンティティ形成の違いや政治性との繋がりに着目する（Mark Connelly, The Great War, Memory and Ritual: Commemoration in the City and East　London, 1916-1939, Woodbridge, 2002）。本研究は、以上のような研究状況を踏まえて、戦死者追悼に関わる問題を、地域社会やコミュニティーを媒介することで、コミュニティーから国民国家、帝国へと至る重層的なアイデンティティ形成と関係づけて考察する。

２．研究の目的

本研究は、イギリスにおける第一次世界大戦の戦死者を追悼する記念碑や式典のあり方を、地域社会や企業など様々な共同体を媒介にすることで、個人のアイデンティティから、共同体、地域社会、国民国家さらには帝国のアイデンティティに至る重層的なアイデンティティ形成の問題として考察する。その際、共同体や地域コミュニティティによって記念碑の様式や追悼式典のあり方に違いがあることに着目し、その違いの原因を地域社会の特質や政治性との関連で考察する。その上で、第一次世界大戦の戦死者の追悼問題が単なる記念碑の建立問題を越えて、失業問題や地域の医療など 1920 年代イギリス社会の様々な課題に、どのような影を投げかけたのかを具体的に解明し、その後の福祉国家形成との繋がりを見通すつもりである。

３．研究の方法

（１）シティおよびイーストロンドンにおける戦死者追悼の事例研究

イギリスの地域社会や企業における第一次世界大戦の戦死者追悼のあり方を分析することで、そのあり方の多様性、重層的なアイデンティティ形成について展望する。なお、地域的な連関性を考慮して、研究対象を下記のように限定する。

第一に、ロンドン・シティ内のいくつかの記念碑を取り上げ、シティという地域社会の特色が記念碑や追悼のあり方にどのように反映したのかを明らかにする。具体的には、王立取引所前のロンドン市の記念碑、ホルボーンの王立フージリア連隊記念碑を取り上げる。「王と帝国のために」の文言のある前者と、銃剣を備えた兵士像が設置された後者の二つの記念碑の様式、そのような様式を取った設立の経緯、序幕式の様子、その後の毎年の追悼式典の変化を分析する。これについてはすでに一部研究に着手している。

第二に、イングランド銀行やプルーデンシャル保険などロンドン・シティの金融機関の戦死者追悼のあり方を解明する。これらの記念碑設立に際して、地域の教会や病院など地域のチャリティーとどのようにつながっていたのかにも留意する。二つの金融機関の事例研究を通じて、イギリスではなぜ企業ごとに戦死者追悼が行われたのかについて考察する。

第三に、ロンドン東部に広がるイーストハム、ウェストハム、イルフォード、さらにはロムフォードなどの地域の分析である。これらの地域は東部に行くに従って、低所得者居住地域、工業地域、中産階級の住宅地区といった多様な性格のコミュニティーが並んでいる。各地域における戦争記念碑の建設運動のあり方を比較検討することによって、地域住民の特色や支持政党の違いが、建設する記念碑の種類、病院建設などチャリティーの有無などにどのように反映するかを解明する。

（２）イースト・エンドの労働党市長のコミュニティー

以上の分析を前提として、1920 年代のイギリス社会に戦死者追悼問題が投げかけた諸問題がその後の福祉国家の形成にどのようにつながるかの見通しを検討する。具体的にはロンドン・シティに隣接し、ドックランド地区や周辺の工業地区を含むイースト・エンドに属するポプラーや

ハックニーなど、労働党が市長を務めた共同体を例にとって、記念碑建設問題と当該時期の失業問題、貧困問題との関係、あるいはトレードオフの関係を具体的な場において解明する。場合によっては、記念碑建設がまったくなされなかった地域もあり、なぜ記念碑建設がなされなかったかを考察する。

（３）国家的追悼施設セノタフの位置づけの再検討

以上を前提として、イギリスの国家的追悼施設であるロンドンの「セノタフ」の意味を再検討する。「セノタフ」は、1919 年 7 月ロンドンの戦勝パレードにおいて戦死者を象徴するものとして、撤去する予定で政府によって建設された。ところが、夫や息子を亡くした女性たちが花を捧げたことをきっかけに、政府は「恒久的な」セノタフの建設に至った。また、社会的に疎外された傷痍軍人たちの生存を賭けた権利主張の場ともなった。「セノタフ」のあり方をロンドンという地域社会の中に再度位置づけて、国家的追悼施設の意義をロンドンの地域社会の観点から再検討する。

４．研究成果

（１）2017 年度

ロンドン・シティの狭い区域内には数多くの記念碑が点在する。それは決して偶然ではなく、シティの金融機関に勤める従業員の多くが志願して戦死したことと関係する。初年度は、ロンドン・シティの調査と分析を実施した。2017 年 11 月 12 日（日）リメンバランスサンデーの正午ごろに、王立取引所前のロンドン部隊記念碑前で始まった追悼式典を実際に観察し、その様子を動画および画像に収めた。これはコミュニティーの追悼のあり方を知る上で重要な機会となった。また、金融機関や教会、鉄道の駅の記念碑など、11 月 12 日の追悼式典後の記念碑の様子、とくに奉納されたポピーの花輪の文面を画像に収め、式典参加者やそのメッセージを資料として入手した。現地調査後半では、かつてのロンドンの波止場地区であるポプラー周辺や、さらにロンドン東部のイーストハム、ウェストハムに残る企業の記念碑を調査した。
研究成果としては、イングランド銀行記念碑の設立に関する一次資料を分析し、職員たちによる記念碑設立活動の詳細を明らかにした。それはイングランド銀行の職員たちの自発的な活動として追悼委員会を通じて行われた。同委員会は、職員の階層や所属する部門の特質を反映した。また、職員総会での委員長ブライアントの演説を分析すると、世界の金融センターとしての自負心やその中枢としての自行への誇りが、強い愛国心を表明させたこと、また、自行の敷地拡大時における教会の解体や物質文明を担うことへの罪意識が、記念碑としての十字架建立の提案に至ったことを確認した。

（２）2018 年度

シティに勤める職員層の住宅地としてのロンドン東部郊外住宅地（具体的には、イルフォード、ウォンステッド、ウッドフォード）の調査を行い、そこにおける戦争記念碑や追悼式典の特徴について調査した。1920 年代に開発が行われた郊外住宅地には、ロンドン・シティの金融機関等に勤める職員たちが住居を購入して鉄道で職場に通勤した。このような当時の新興の郊外住宅地において特に戦死者追悼活動が盛んであったことが現地調査によって改めて確認でき、また、現在においてもその伝統が引き継がれていることも明らかになった。これに関連してイルフォードにある Redbridge Library において、今回調査した記念碑のあるコミュニティーの地方史関係文献を閲覧し、関係情報を入手した。愛媛大学法文学部で刊行した『多文化社会研究』第 6 号（2019 年 3 月）に「ロンドン北東部郊外住宅地における第一次世界大戦の戦死者追悼―イルフォード、ウォンステッド、ウッドフォード―」を公表した。

（３）2019 年度

当初の計画では、ロンドンのシティに隣接したポプラーなどいわゆる「イースト・エンド」について研究を進める予定であった。これらの地域では、第一次世界大戦後に労働党市長が誕生し、ロンドンの港湾機能の衰退など産業構造の変化を経験したため、失業問題や医療、救貧税負担問題が優先課題となり、他の地域とは異なった戦死者追悼の様相を呈していた。ポプラーやイーストハム、ブロムリー・バイ・ロウなど、これらの中核地域の現地調査は 2017 年度にすでに実施していたので、それらの画像の整理、文献の分析を中心に進めた。

2019 年 12 月末から 2020 年 1 月にかけて、ロンドンのギルドホール・ライブラリーで文献調査を実施した。この文書館には古文書や公文書、新聞資料を含めロンドン・シティの歴史を研究するための貴重な資料が揃っていた。今回は、The City Press というシティの地元の新聞を 1918～1945 までの、主にロンドン・シティの戦争記念碑および毎年の 11 月 11 日におけるシティの戦死者追悼記念式典に関する記事を中心に検索し、収集した。これまで第一次世界大戦の戦死者追悼記念碑を中心にロンドンの現地調査を行ってきたが、今年度は、2019 年 12 月 30 日～2020 年 1 月 10 日に、ギルドホール・ライブラリーで資料調査を実施し、ロンドン・シティの地元紙

に相当する The City Press の戦死者追悼に関連する記事を調査し、関係記事を収集した。これによって、これまで The Times 紙の記事ではカバーできなかった、ロンドン・シティの個別金融機関の戦争記念碑や追悼式典について詳細な情報を入手できた。

2017 年 11 月に実施した現代におけるロンドン・シティの追悼式典の現地調査と比較することで、これまでの研究成果を資料に基づいてその意味づけをすることが可能となった。その一部を、『多文化社会研究』第 7 号に論文「ロンドン部隊記念碑の除幕式とロンドン・シティ」で明らかにした。

（４）2020 年度

新型コロナウィルス感染の拡大によってロンドンでの現地調査はできなかった。そのため、これまで実施してきた現地調査の結果と、文献調査の結果を改めて再構成することによって研究を進めた。具体的には、ロンドン・シティの市民的記念碑である「ロンドン部隊記念碑」の設立に関わる新聞報道を使って、記念碑の除幕式を分析した。「ロンドン部隊記念碑と戦死者追悼式典―現代に引き継がれる第一次世界大戦の戦死者追悼と捧げ物―」『多文化社会研究』第 8 号 2021 年 3 月と「ロンドン部隊記念碑の除幕式と新聞資料」『資料学の方法を探る』2021 年 3 月が、その研究成果をまとめたものである。その結果、「ロンドン部隊記念碑」は、ロンドン・シティが主導して建てたものでありながら、ロンドン・カウンティという広域のロンドンを取り込むことによって、シティだけでなく広域ロンドンのアイデンティティをも示す記念碑としてその後も位置づけられることになった。そのことは、現在にも行われている 11 月 11 日前後の追悼日曜日における追悼式典、さらには、その前日の土曜日に行われるシティの市長就任パレードである「ロードメイヤーズ・ショウ」にも示されていることを確認した。

（５）2021 年度

これまでの資料調査で収集した The Times と The City Press の記事を整理して、ロンドンのホワイトホールにあるセノタフと、ロンドン・シティにある様々な戦争記念碑の設立に至る経緯、除幕式の様子、その後毎年の１１月１１日休戦記念日における式典の様子を新聞記事から復元した。その結果、ロンドンを基盤とする全国紙 The Times とロンドン・シティの地方紙の性格を持つ The City Press の両紙に掲載された記事を比較考量することで、同じ記念碑や除幕式の報道に微妙な違いがあることが判明した。特に The City Press の記事に示されたシティの関心のあり方や出席したシティ関係者の詳しい情報を利用することで、戦争記念碑を地域コミュニティーの視点から捉えることが可能になった。この研究成果は、図書『ロンドンにおける戦死者追悼と市民』にまとめることができた。

また、この研究成果をまとめる過程で、ロンドン・シティの市民的記念碑「ロンドン部隊記念碑」と、ロンドン・シティと密接な関係を持つ「王立フュージリア（シティ・オブ・ロンドン）連隊記念碑」を対比することで、ロンドン・シティの志願兵の受け皿として、いくつかの選択肢があったことも理解できた。前者は、ロンドンの郷土防衛部隊 Territorials の戦死者を追悼することに重きが置かれているために、第一次世界大戦開戦とともに、それとは別に募集された「キッチナー新軍」を主に追悼する王立フュージリア連隊記念碑では、同じ志願兵部隊でも、シティとの関係性において性格の違いがあることも判明した。この成果は、『多文化社会研究』第 9 号に「王立フュージリア連隊記念碑とロンドン・シティ」として掲載した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 吉田正広	４．巻 8
２．論文標題 ロンドン部隊記念碑と戦死者追悼式典―現代に引き継がれる第一次世界大戦の戦死者追悼と捧げ物―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 多文化社会研究	６．最初と最後の頁 49～59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田正広	４．巻 20
２．論文標題 ロンドン部隊記念碑の除幕式と新聞資料	５．発行年 2021年
３．雑誌名 資料学の方法を探る	６．最初と最後の頁 17～24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田正広	４．巻 7
２．論文標題 ロンドン部隊記念碑の除幕式とロンドン・シティ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『多文化社会研究』	６．最初と最後の頁 26-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田正広	４．巻 6号
２．論文標題 ロンドン北東部郊外住宅地における第一次世界大戦の戦死者追悼―イルフォード、ウォンステッド、ウッドフォード―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 多文化社会研究	６．最初と最後の頁 34-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉田正広	4．巻 5
2．論文標題 第一次世界大戦後のイングランド銀行職員の戦死者追悼	5．発行年 2018年
3．雑誌名 多文化社会研究	6．最初と最後の頁 45-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉田正広	4．巻 9
2．論文標題 王立フュージリア連隊記念碑とロンドン・シティ	5．発行年 2022年
3．雑誌名 多文化社会研究	6．最初と最後の頁 65-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 吉田正広
2．発表標題 ロンドン・シティにおける第一次世界大戦の戦死者追悼式典と新聞資料
3．学会等名 愛媛大学資料学研究会
4．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

1．著者名 吉田　正広	4．発行年 2022年
2．出版社 晃洋書房	5．総ページ数 180
3．書名 ロンドンにおける戦死者追悼と市民	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関